

混声合唱曲集「アカペラの響き」より

よろこびの歌 —近江靖子/詩

くちびるから流れる
希望の空へ空へ
わきあがる メロディーは
よろこびの歌
いつもいつもいつまでも
抱きしめていたいきもち
ああ よろこびを抱くよろこび

肩と肩くみあわせ
うでとうでつなぎあい
みつめあう瞳には
よろこびのうた
友へ友へ友達へ
その歌声はつたわる
ああ よろこびをわかつよろこび

風と雲とがはこぶ
みんなの歌う声に
小鳥も声あわせる
よろこびの歌
まわるまわるまわるだろう
その歌声は世界を
ああ よろこびを歌うよろこび

女声合唱曲集「落葉松」より

飛驒高原の早春 —岩間 純/詩

しらがほ だんご おを じよきく
白樺の肌温む音を 序曲に
飛驒高原の 早春は五月

こころ つながる 郷愁のうたに
山の幸は 今一斉に花ひらく

はは ふるさと そら あか
母なる故郷の 空は明るく
飛驒高原の 早春は五月

こどり のうたも みどりに 映え
ひと人は自然の中に 心を洗う

あなたとわたしと花たちと —峯 陽/詩

五月の花が咲いたら
旅に出かけましょう
あなたとわたしと花たちと
やさしく触れあいながら

五月の風が吹いたら
旅に出かけましょう
あなたとわたしと風たちと
やさしく確かめあって

まぶしそうな若葉です
さざめくような街です
線路は空へと続きます
五月はあなたの瞳です

五月の歌をうたって
旅に出かけましょう
あなたとわたしと歌たちと
やさしく愛をこめながら

からまつ
落葉松 —野上 彰/詩

落葉松の 秋の雨に
わたしの 手が濡れる

落葉松の 夜の雨に
わたしの 心が濡れる

落葉松の 陽のある雨に
わたしの 思い出が濡れる

落葉松の 小鳥の雨に
わたしの 乾いた眼が濡れる

I みなかみ

いま生まれたばかりの川
山の光は
小鳥のうぶ毛の匂。
若草と若葉のかさなりは
天へつづくみどりの階段。
阿蘇外輪の春。
熔岩の寝床で
いま生れたばかりの川
すがすがしい裸の愛が
頬をあからめて歌いだす。
素足でげんきよく走りだす。
さあ遠い旅行がはじまる。
けものの白い骨を
狩人の墓を洗い
森のくらさをおそれずに
滝の高さをおそれずに
さあ未知のくにぐにへの旅行がはじまる。

II ダムにて

いそいそと瀬を走り
青葉をくぐり若葉をくぐり
もだえてみぎに左にうねり
愛の水かさがふくらんだところで
非常のダムにせきとめられる。
川よ
愛の川よ
もっと深さをもつように。
もっと重さをもつように。
もっと冷静であるように。
〈男声〉
不屈の決意をした青年です。
いのちがけで愛するために。
見よ！水面に映したくれないの雲。
〈女声〉
あなたを信じます。
あなたの愛を
ごらん！魚たちの鰓呼吸のおだやかさ。
川は
大きな川は
かがやく活路をさがします。
自然に育てられた愛が
筑後平野の
百万の生活のなかへ
歓喜の声をあげて走ってゆく。

III 銀の魚

しずかに しずかに
楠の木かげを漕ぎだした
川の男の
たくましい胸板。
あたらしい棹を入れる
川の女の
清らかなうなじ。
朝の川面に
投網がふくらむ。

さざなみが湧く。
さざなみがひろがる。
深い川の深い心の
いきのよい魚をとらえるのだ。
朝日にはねよ銀の魚。

IV 川の祭

祭よ
川を呼びおこせ。
とっぷり暮れた大きな川へ
太鼓をたたけ。
太鼓をたたけ。
一千匹の河童よさわげ。
どどん どどん
どどん どどん

祭よ
川を呼びおこせ。
一万匹の河童よさわげ。
十万匹の河童よさわげ。
どどん どどん
どどん どどん

祭よ
愛を呼びおこせ。
はげしい愛を呼びおこし
花火をあげよ。
花火をあげよ。
一万匹の河童をてらせ。
ばばん ばばん
ばばん ばばん

祭よ
愛を呼びおこせ。
十万匹の河童をてらせ。
百万匹の河童をてらせ。
ばばん ばばん
ばばん ばばん

V 河口

終曲を
こんなにはっきり予想して
川は大きくなる
終曲を華やかにかざりながら
川は大きくなる
水底のかわいい魚たち
岸辺のおどけた虫たち
中洲のかれんな小鳥たち
さようならさようなら
川は歌うさようなら
紅の櫛の葉
楠の木陰
白い工場の群よ
さようならさようなら
川はうたうさようなら
筑後平野の百万の生活の幸を
祈りながら川は下る
有明の海へ
筑後川筑後川
その終曲あゝ